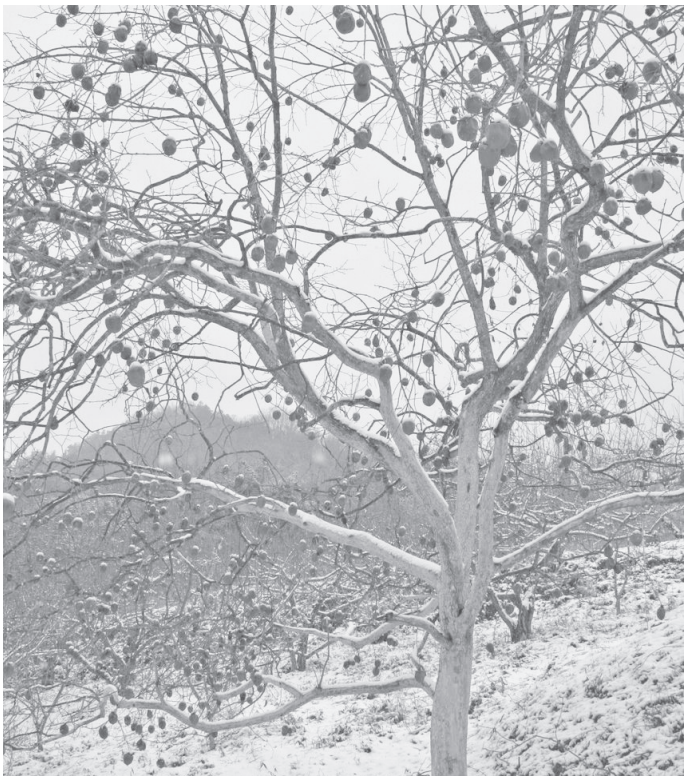
JIM-NET便り

2012年3月20日（火）

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746



福島県伊達市の柿の木。あんぽ柿が有名だがセシウムがでる可能性があるので、昨年は出荷を差し控えたとのこと。セシウムを除去するため木の皮を剥いだが、今年の秋はどう実るのだろうか。

NEWS

～震災から一年～ 被災地支援を振り返って…P.1～3
参加団体からのメッセージ
子どもの平和と生存のための童話館基金…… P.3
福島支援と脱原発世界会議…… P.4
JIM-NET会議速報…… P.5
アルビル現地プロジェクト報告……P.6
チョコ募金 ～お礼とご報告～……P.6
アルビルから、こんにちは（4）……P.7
参加団体ご紹介
アラブの子どもとなかよくする会……P.7
鎌田代表のつぶやき…… P.8
グッズのご紹介…… P.8
局長くん第9話 …… P.8

震災から一年

被災地支援を振り返って

2011年3月11日。1年過ぎた今も多くの人々にとって忘れられない日となっていることと思います。未曾有の災害を目の当たりにしたそのとき、JIM-NET参加団体の各メンバーはどのように考えどのように行動したのでしょうか。この度の支援は、各団体にとってそれぞれの立ち位置を再認識し、新たに志を固める機会となりました。この1年を参加団体のメンバーに語り合ってもらいました。

ゲスト（50音順）：神谷さだ子（JCF事務局長）、谷山博史（JVC代表）、平野裕二（カタログハウス）
コーディネーター：佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

佐藤　今回はJIM-NET便り特集のための座談会にお集まりいただきどうもありがとうございます。まずは3・11のとき何を考えどうしようと思ったか、ひとりずつお願いします。

谷山　震災のときはスタッフの安全を確保することで精一杯でした。事務所を一旦閉鎖してスタッフを来させないようにしました。また震災の映像を何回も見ていることでトラウマになりかねないので、シニアのスタッフが、テレビを続けてみないようにメールで呼びかけたりしました。震災の一週間後に医療で宮城に入るシェア（国際保健協力市民の会）の協力を得て、現地に入り調査を開始しました。

写真左より谷山、平野、神谷、佐藤　（於JIM-NET事務所）

神谷　私たちはJCFの定款で、世界の被曝者を支援する、ということがミッションになっています。鎌田代表が南相馬市の小高病院の院長と知り合いだったことから、そちらと連絡をとりつつ現地に出発したのが3月20日。チェルノブイリの活動で汚染地もずいぶん歩いてきているので、覚悟はできていました。

平野　3月11日は、ちょうど『通販生活』の夏号を製作しているときで、作業も終盤に入っていました。震災と原発事故の影響で、何本かの記事を差し替えたりボツにしたりして、校了までの約1ヵ月は、雑誌を発行するのに手一杯といった感じでした。会社としては、被害の多かった東北地方の自治体を中心に寄付をし、防寒用衣料などもお届けしましたが、それだけでなく誌面でもカンパを読者に呼びかけたんですね。この時は震災や原発事故の詳しい状況が分からなかったため、「被災者のために」という名目でカンパをお願いしました。

佐藤　**意思決定というのは皆さんどうされたんでしょうか。どのように皆と思いを共有できたのでしょう。**

神谷　JCFはチェルノブイリをやってきた経験から、外部被曝・内部被曝を避け、健康診断はきちっとしていかなくてはいけない、としっかり見えていたんですね。そのために何をやるか、線量の高いところを見つけて近寄らないようにするとか、守るべきは妊婦さん、つまり胎児、乳幼児、子どもたち、というのは当初の段階から考えていたので、大きな方針はJCF誰もが思っていることでした。具体的にどうやるかということはずっと話し合いながらきています。

谷山　今回の震災では自分たちも被災にあったという共同体験みたいなものがあるから、みんななんとかしたいという思いがあったと思います。だけどそれをプロセスに載せるのはそんな簡単ではなかった。まずは心の準備のため、現場の情報やぼくの気持ちをメールで伝えていったんですよ。そのうち少しずつ僕たちに何ができるかという議論が始まりました。

タイミングをどうするかというときにシェアと一緒に行こうって話になったから、それはすんなり行けたと思うんですね。

平野　寄せられたカンパは当初、被害の大きかった宮城・岩手・福島への支援にあてる予定でした。でも、原発事故による甚大な被害状況が次第に明らかになってきたため、社内で議論したうえで、福島に特化した支援をすることにしたんです。具体的には、空間放射線量測定器50台と食品放射線量測定器8台をカンパのおカネで購入。福島の方達を中心に、それらの測定器をお貸しすることになりました。

佐藤　**現在の活動と今後について話していただけますか。**

谷山　南相馬市では、緊急の情報を市民に伝える手段がなかった。防災無線は全部津波でやられちゃったし。回覧板だとか市の広報だとか届ける方法はないし自治体も市民もばらばらになっていた。支援のキーワードは分断を乗り越え、絆を保つ情報だと確信したんですよ。で考えたのが災害FM。市役所の人たちと話して、市のほうで立ち上げるということになったので全面的に応援することにしました。南相馬災害FMです。管轄は市だが商店街振興会が事業主体になっている。JVCは放送局に常駐する運営スタッフを派遣し、機材支援や技術向上の手伝いをはじめた。なるべく市の広報だけじゃないものを流している。市民参加型のコミュニティFMになろうという方向もでてきて、少しずついろんな情報を取り入れられるようになっている。市をバックとしたある種正当性のある公共放送を通して、少しでも安全な方向へ導いてきたい。三春町では農家支援をしています。南相馬、三春に長く関わるっていうことだけは間違いないのですが、出口戦略は描けない。私たち自身が原発問題の当事者ですから被災した人たちと苦しみながら模索することしかできないのです。

神谷　福島から離れたところでの保養はとても意味があると思っていたので、カタログさんの企画、7泊8日を長野県で過ごす「福島っ子の夏休み」では健康診断の協力をさせていただきました。松本ではJCFの食品測定室が動き出します。信州大学の理学部と連携して食品の測定をしていきます。

またベラルーシの病院の先生がもってきてくれた『放射能と妊娠』や『食品からの被爆を防ぐために』などの冊子を翻訳中です。チェルノブイリが事故から25年たっても解決できない問題を持ち続けているように、支援の期間は区切れないものと思います。半永久的に。そうした中、小さなNGOとしてできることは、子どもたちがきちっと検診を受けられるようにしたり、内部被曝を防ぐようにいろいろな手立ての応援をしたり、測定器を貸し出したり。福島県内で検診を受けられるようにすることが今年度の目標です。保養もいいと思っています。

平野　私たちは「福島の子どもたちの健康を守る」ということを大きな目的にし、そのために何をすべきか考えてきました。ただ、福島県立医大が中心となって甲状腺検査や健康調査を進めているなかで、それとは別に福島県内で健康診断や検査をすることは難しいんですね。今後の支援について具体的なことはまだ決まっていませんが、県では手の回らない部分をフォローする健康診断・相談や、昨年のような保養プロジェクトなど今も模索しています。

佐藤　**福島を世界とどう結びつけていけるでしょう。世界を脱原発に導いていけるでしょうか。**

平野　世界どころか、日本を脱原発に向かわせること自体が大変な状況になっていますよね。震災から１年も経たないのに、原発事故なんて、なかったかのようなことになっている。

谷山　ある調査によれば、日本の子どもたちの8割方は、世界は今後悪くなると思っているということであり、じゃあ変えられると思うか、と聞くと、8割くらいがそういう力はない、変えられないと答えるらしいんですよね。子どもがそれだったらおそらく無理。子どもが何か変えられるということを感じられるような教育がないと。

佐藤　今、だから大人がそれを見せなきゃダメでしょうね。子どもたちにそれが見せられないともう絶対変わらない。

谷山　そうね。少しでもそう。変えられるっていうのを。子どもたちに対して変えられるっていうのをひとつでもふたつでも残していかないと。

～参加団体からのメッセージ～

深く想い、よく考え、着実に行動

「子どもの平和と生存のための童話館基金」代表　川端　強

震災前、当社を取材した全国紙の記者は、当社の、絵本・こどもの本への質的なこだわりに、最初は驚き、次に共感されました。震災後、その記者より次のようなメールを受けました。「この事態に際し、ある高名な政治学者は、『これからは、ただおもしろいだけの本ではなく、物事を深く考えるための本が読まれるようになるだろう』と言っています」

人が、物事を深く想い、よく考えるためには、幼いころに接する絵本・こどもの本が、楽しさとともに、知的、文学的、精神的な刺激に満たされていることが必要です。それが、当社の仕事の拠り所です。

子ども達に絵本を読んでくれる大人がいる避難所に限って、絵本と書棚のセットを送りつづけました。絵本は、子どもが手に取るだけでは、ただの絵つきの本でしかありません。でも、やさしい人の声で読まれる時、そこに、温かい人間どうしの触れ合いと信頼が生まれます。愛情と抱擁の感性が生まれます。たぶん、今、被災地には、この愛情と抱擁がより一層大切になっているのでしょう。

昨年8月、「童話館ぶっくくらぶ」の会員を訪ねて大船渡市へ行きました。途中の気仙沼市、陸前高田市の被災地にたたずみ、感じるのは、「何もない」ということ。「何もない」ということから視えてくるものについて、深く想い、よく考え、そのことで得られた認識をもとに、着実に行動していかなければなりません。

ナガサキ―イラクーフクシマは、原爆ー劣化ウラン弾―原発と、連なっています。

（写真：郡山のどんぐり幼稚園での読み聞かせ。童話館から提供された本も使われている）

福島支援と脱原発世界会議

小玉直也（JIM-NET福島支援担当）

今回は、JIM-NETの福島支援とともに、1月14日15日に開催された脱原発世界会議での取り組みなどをご紹介します。

【福島ボイス（FukushimaVoice）】

原発事故による放射能の影響により長期的な支援が必要となっている福島では震災後、放射能に不安を感じている県内各地の市民が新たなNPOを立ち上げ、子ども達を守るための除染や移動保育、線量測定などの活動を始めています。JIM-NETは７月から福島プロジェクトを立ち上げ、放射能の除染活動やサマーキャンプの支援を開始しましたが、そこで出会った郡山市在住の母親たち数名は、毎月の定例会などを通じて、『学校給食の安全性を高めたい』、『当局の除染計画に地域住民やPTAなどが巻き込まれるのはおかしい』、『福島産の農作物が本当に安全なのか知りたい』などの思いを高め、「安全・安心・アクションin郡山」をスタートさせました。そして、福島に住む私たちの声を全国全世界に広げるため福島ボイスを始めたいと相談されたJIM-NETはその支援をすることにしました。福島ボイスでは、将来の結婚や出産などへの不安、除染や食への不安、安全基準を次々と変える東電や政府への思いが口々に語られています。福島の生の声に耳を傾けて考えてほしいと感じたのでノーカットの映像で配信を始めました。福島に住み続ける事を迷っている方々の涙に触れ、全国の人にこの福島ボイスを聞いてもらい、電気のスイッチを入れる瞬間に彼女らの悩みを思い出してほしいと感じ、福島での活動を続けています。

【脱原発世界会議】

今年1月、脱原発世界会議の実行委員会に福島ボイスを紹介すると、ぜひ会議本番でやろうと決まり、急遽、JIM-NETの活動の写真展示と福島ボイスのスペースを作る事になりました。脱原発世界会議では英語の翻訳字幕入り映像を2日間流し続けましたが、その映像を見て涙する人などもおり、多くの人の心が動かされ、新しいつながりも広がっていきました。またJIM-NETの企画として「福島の市民たちの活動からみえてくるもの」を2日目の午前中に開催、原発事故後に福島で活動を始めたハーメルンプロジェクト、安全・安心・アクションin郡山、チーム二本松にも参加してもらい福島の生の声を届けました。ハーメルンプロジェクトは福島の子ども達を放射能から守るために活動を始めた市民たちで、避難や疎開、保養キャンプなど様々な形で活動してきました。代表の志田さんご自身、妻子を岡山県に避難させ単身残って奮闘中です。チーム二本松は真行寺の佐々木副住職が中心となり、除染作業に取り組みながらサマーキャンプや食品の放射能測定をするベクレルモニターの導入など様々な活動を繰り広げています。明治の粉ミルク「ステップ」からベクレルモニターで放射線物質が検出されたことはメディアでも注目されましたが、赤ちゃんを守るための大きな一歩となりました。しかし佐々木副住職は、原発事故さえなければ放射性物質の混入などなかった粉ミルクなのに、東京電力の責任や賠償は追求せず、明治の原因と責任の追求に終始する報道に、本来の加害者が見えず根本的な解決にならない、と違和感を感じていました。安全安心・アクション・in郡山でも、カタログハウスの協力で食品ベクレルモニターを導入し、食品の測定を始めました。近所の市民や不安を感じている方々の思いに応えるべく、給食の安全性を高めるために教育委員会に申し入れをしたり、除染した放射性物質の仮置き場で不安に思う近隣住民といっしょに請願したりと、次から次におこる新しい問題に取り組んでいます。どの団体にも共通しているのは、子ども達の健康を守りたいと必死になっている事です。

【脱原発社会に向けて】

福島第一原発から60km前後に住んでいて原発の恩恵を感じた事もない市民たちが、日々苦しみ悩み闘っています。原発事故が起こるまでは特別な放射能の知識もなく、普通に毎日を送っていた方々です。佐々木副住職が、「放射能のことを考えなくて良かったあの時に戻りたい。だけど、あの時無関心でいた自分にも責任ある。政府や東電の責任は確かに大きいが容認していた。反対しなかった私たちは加害者の一端でもある。もう2度と加害者になりたくないし、一日も早く日本中で脱原発の舵をきれるよう頑張って行きたいです」と話していたことが忘れられません。脱原発世界会議には約1万2千人が参加、新しい脱原発への絆が広く太くなる有意義な企画でした。このような会議にJIM-NETの一員として関われた事を誇りに思います。これから第２回目の議論も始まるそうですが、本当に原発が無くなる流れの一翼を担い、福島ボイスの女性たちの思いを胸に刻みながら、「2度と加害者になりたくない」という佐々木副住職の言葉を忘れる事なく私も頑張っていきたいです。わずか40年～60年しか稼働できない原発、多くの方々が不信感を持っている放射能。21世紀の遅くない時期に日本で廃炉への舵を取れるよう福島の人達の声を届け続けていきたいです。

JIM-NET会議速報

佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

2月21-22日の2日間にわたり、イラクのアルビルでJIM-NET会議が開催されました。日本からは、鎌田實医師、井下俊医師、佐藤真紀、阪口佳代（以上JIM-NET）、坂下医師、リカー医師（信州大学）、赤尾和美看護師（アンコール小児病院）、神谷さだこ（JCF）が参加。イラクからは、バグダッド、バスラ、モスル、ドホーク、アルビルの6病院（バグダッドは2病院）から合計16名の医師が参加し、ローカルスタッフを入れると25名を超える参加者でした。

先ず、井下医師が会議に先立ちアルビル入りし、ホテルに缶詰状態で、各病院から送られてくる治療成績のデータをまとめあげました。私たちは、白血病の中でも一般的なALL（急性リンパ性白血病の一ヶ月以内の死亡率）に注目して、治療成績をあげるための活動を行なっています。先ずは病院間の比較が出来るようにきちんとしたデーターをとり解析する方法から指導してきました。それまでは、10%を超えていた死亡率も2009年には、4.9%まで下げる事がでましたが、2010年には、5.8%、さらに2011年には、7.7%と高くなってしまい、治療成績が悪化している事がわかりました。

この理由は、患者数が増えており、病院のキャパシティをオーバーしてしまっており、感染症対策などの十分なケアが出来ていないようです。医師たちが紹介する病院の写真があまりにも汚いのに驚きました。また、貧困などの理由で、通院しない子どもたちも増えているようです。早期発見と正確な診断技術も必要で、現在信州大学に留学中のリカー医師より、イラクの患者の血液サンプルの遺伝子解析の研究の報告がありました。今後イラクがそのような高度な技術を取り入れていくことに期待が高まります。

開催にあたり挨拶する鎌田代表と佐藤事務局長

JIM-NETでは、地域ごとに分けて、先ず、それぞれの病院をモデル病院として機能させ、その後イラクの病院同士が助けあって発展していくことを目指しています。

バグダッドは、高度な医療技術協力、バスラは、総合的患者ケアへの協力、アルビルは、感染症対策の協力という風にメリハリをつけていますが、バグダッドは、優秀な人材がそろっているものの、施設がなかなか新しくならず、患者数も多くて余裕がないという状況、バスラは、早くから院内学級をやっていて、昨年は、バグダッドでも院内学級を開設し、治療にかかる交通費の支援も開始。アルビルでも院内学級を始めるなど、病院同士の協力も出てきました。アルビルの病院をその後視察したところ、鎌田医師は、3年前に比べ、随分きれいになっているという印象を受けたとのことで、近いうちに骨髄移植も出来るのではないかとの意見も出ていました。これらを持ち帰り、今後理事会などで12年度の活動方針を決めていく予定ですが、改めて、しっかりとした支援が必要だと痛感しました。

会議の内容に関しては、次号で井下医師に詳しく書いていただく予定です。

JIM-NET会議に参加したイラク各地の医師たち

アルビル現地プロジェクト報告

セルセパレーター資材が到着しました。

阪口佳代（JIM-NETアルビル駐在スタッフ）

今回は、JIM-NETがイラク現場で行っている支援活動の中から、「セルセパレーター」資材供与に関するご報告を致します。

「セルセパレーター」という聞きなれない名前、皆さまはこの器械をご存じでしょうか。セルセパレーターについて簡単にご説明しますと、これは献血の際に、血液成分から白血病治療に必要な『血小板』を分離採取する器械です。普通、輸血と言いますと『赤血球』の輸血（貧血の改善）のことを言いますが、白血病の場合は、脳出血や消化管出血などの出血が、患者さんの重大な問題になるため、それを防ぐために血小板を輸血する（出血を抑える）ことが必要になります。この時に、必要とされる血小板を効果的に分離して採取するための器械が、この「セルセパレーター」という器械です。普通の献血（赤血球採取）では十分量の血小板が採れないため、この特別な「分離採取」器械が必要になるのです。

この器械を使うためには、ドナー１人につき１セットの「採取セット」が必要になります。このセットは高額で、現在のアルビルでは、１セットの値段が300ドルかかります。ナナカリ病院には、クルド自治政府（ナナカリ病院のあるアルビル市はクルド自治区の首都）から、このキットが支給されていますが、支給数が少ないため、とても需要を満たすことはできません。そこでJIM-NETでは、今年度の支援活動の中に、このセルセパレーター採取キット供与を取り入れることにしました。今年度のナナカリ病院への支援数量は80セット、その他付属品も含め合計で28,000USD相当の支援が決まりました。

そして11月30日、待ちに待ったキットがナナカリ病院に到着しました。病院のキット在庫がほぼゼロになったところにちょうど到着したため、関係者の喜びもひとしおでした。

キット到着（院長と担当技師）

セルセパレーターを実際に使っているところを見学しましたが、セルセパレーターを使って血小板採取する時間は、ドナー１人につき約１時間。ナナカリ病院の「血液バンク」に来るドナーは、日本同様ボランティア（無償）の方々です。また、患者さんの家族が必要に応じて献血することもあります。こちらでは、日本のように献血車が町に出ていくことは無く、献血は病院に来てくれる人を病院が待つ形です。お国柄から、病院を訪れるボランティアは全員男性です。

セルセパレーターで血小板採取中

血液バンクは、直接患者さんと接することは無い部署として、病院の中でも比較的静かで地味な、「縁の下の力持ち」的存在です。しかし、白血病治療にとって血小板採取は必須であり、これを効果的に採取するためのキット支援は、患者さんの闘病を助けるものとして、支援側にとっても重要な活動と言うことができます。

今回のセルセパレーターキット購入も、日本の皆さまからお預かりした募金を使って実現することができました。皆さまのご支援に、ナナカリ病院一同より、改めて感謝申し上げます　プレイルームという「ハード」ができて、これまで「ソフト」主導でやってきた本活動、特にボランティアの大学生の参加協力等が、今後更に効果的で良い形になっていくように、試行錯誤をしながら皆で続けて行きたいと思います。

チョコ募金 ～お礼とご報告～

JIM-NETチョコ募金担当　榧野ヒカリ

チョコ募金にご協力いただいたみなさま、本当にありがとうございました。今回は福島支援も含むため、チョコ募金数を増やしたのですが、前回より10日も早く終了するほどの反響をいただきました。みなさまがどんな思いで募金してくださったか、いただいたコメントから伝わってきます。その中のほんの少しをご紹介いたします。みなさまの温かいお気持ちを、イラクの子どもたちや被災された方々にしっかりとお届けできるよう、これからもスタッフ一同頑張ってまいります。

- このチョコがイラクや福島の子ども達だけでなく、日本の中小企業をも応援することになり、また障害のある方達がやりがいとともに発送してくれることに、大きな意義を感じます。
- 去年注文したときは、このチョコに福島も助けられることになるなんて思ってもいませんでした。今ならわかります。外からの支援がどんなにありがたいか。
- 小2の息子が貯めたおこづかいから1000円出したいと言ってくれました。親として、とてもうれしく思っています。

～ アルビル（Erbil）から、こんにちは（4）～　春を迎えるアルビル

阪口佳代（JIM-NETアルビル駐在スタッフ）

この記事を書いている2月中旬のアルビルは、日本と同じように、一年で一番寒い季節です。先月には、アルビルの市内でもみぞれや雹が降り、遠くに見えるクルディスタンの山々にも白い雪が見られるようになりました。ついこの間、気温50度を超える夏の日々を経験したことが、信じられなくなるような、気候の変わりようです。

そして、この会報が皆さまの手元に届くころには、クルドの人々が待ちに待った、春の季節がやってきます。クルド人、クルディスタンにとって、春は、一年で最も大切な、「喜びの季節」です。一年を通して変化の大きい厳しい気候の中で生活する、（かつての）山の民にとって、厳しい季節を乗り越えて迎える春は、祝福と感謝に満ちた、特別の季節です。日本の春分の日や、キリスト教での復活祭等々、世界の各地で春の訪れを祝う伝統行事や宗教行事がありますが、その中でも、この地における春は、これまで私が見聞きした場所の中でも最も、「季節感」と、そして「お楽しみ」に満ちているように感じられます。

この春の祝日は毎年3月21日と決まっており、クルディスタンでは『Nawroz（ナウローズ）』と呼ばれています。ナウローズは、公式には3日間お休みになりますが、多くの人はこの前後2～3週間の休暇を取ります。普段から休日の多いクルディスタン、しかしその話題になりますと、「（その程度では）まだまだ。ナウローズがある。ナウローズには、皆、もっとずっと休むのだ」という、皆のコメントが返ってきます。それだけでも、「それは、大した祭りだ」と思えてしまうナウローズ、クルディスタン最大（長）の休暇シーズンでもあります。

『ナウローズ』『春』、とくれば、次に来る言葉は当然、クルド人が愛してやまない『ピクニック』。ピクニックに必要なものは、クルド料理、クルド衣装、そしてクルドダンス！皆で野山に出かけ、大いに食べ、大いに踊り、楽しみます。ナウローズのお楽しみは、このピクニック抜きに語ることはできません。

さて、私自身は、このナウローズのまさに当日に、JIM-NETの任期を終えてアルビルを発ち日本に帰国します。クルドの伝統衣装も既に同僚から贈られており、クルドダンスの輪に加わる準備は万端でしたが、それができないのが少し残念です。

アルビルでお世話になったイラク、クルドの方々と、日本で応援してくださった皆様が、喜びに満ちた春の季節を迎えられますようにお祈りしております。

参加団体ご紹介（No.８）　アラブの子どもとなかよくする会

アラブの子どもとなかよくする会　西村陽子

アラブの子どもとなかよくする会（1993年設立）は、1991年の湾岸戦争後にPAN（市民団体）の一員として初めてイラクに入ってから21年間、イラクをはじめとするアラブ地域の子どもたちと関わってきました。イラクのがんの子どもたちのことを知ったのは、湾岸戦争後の経済制裁中に医薬品、粉ミルク、浄水器、文房具や衣類などを届けていた時でした。どこの病院でも白血病の患者が増え、多くの子どもが満足な治療も受けられずに命を落としていく現実を目の当たりにしました。そこで、小児病院への抗がん剤や抗生剤などの支援と劣化ウラン弾による健康被害の実態を日本の人々に訴える活動を始めました。並行して、バグダッドの障害児学校・施設のスクールバスを障害者の働く修理工場で修理するプロジェクト（1999年）やイラク戦争直前にヨルダンで仕立てた避難用テントや医薬品をイラク赤新月社に送る活動、バグダッドの貧困地域のサマースクールへの支援（2005年）などにも取り組んできました。2006年にはヨルダンで治療を受けるイラク人患者家族の生活支援のためのクラフト製作・販売のプロジェクト"アファーク"を開始しました。現在は無事治療が終わってイラクに帰国した家族がリーダーとなって、難病の子どもを抱える、地元の家族とともにクラフトを製作しています。また、現地で折り紙などの工作教室や、紙芝居や絵本の読み聞かせ、絵画展や手紙の交換など日本とイラクの子どもの文化交流も続けてきました。近年、日本の高校生たちが、学校祭や地域のイベントでイラクの展示やクラフトの販売をしたり、チョコの袋詰めボランティアをしたりして、継続的に活動に参加してくれています。「イラク人（日本人）ってどんな人たち？」「イラク（日本）ってどんなところ？」を知ることから始め、お互いを身近に感じることによって、一緒に、幸せな世界を作っていけたらと考えています。

"イラク"をテーマに地域のイベントに出展する高校生たち

鎌田代表のつぶやき。。。

東日本大震災から1年が経とうとしています。家族を失った方、仕事を失った方、家を失った方、村を失った方、絆を失った方。たくさんの方が傷つきました。そうした中、少しだけですが人と人とのつながりの大切さを築いた1年でもあります。バレンタインのチョコ募金、今年は14万個を用意しましたが予想以上に早くなくなりました。皆さまのご支援の賜物です。毎年、応援してくださった福島の方から、まさか自分の県の子どもをこのチョコ募金で応援してもらうようになるとは思わなかったというメッセージをいただきました。仕事のあるご主人を郡山に置き子どもを連れて東京へ放射能疎開している方はチョコ募金のお手伝いをして下さいました。とても有難いことです。

2月21日・22日イラクのアルビルに行ってきます。イラクの仲間のドクターたちと会議をして、今のイラクの政情や子どもたちの病状そして治療成績などを聞いてくるつもりです。信州大学の大学院で遺伝子の勉強をしているリカー先生は英文の論文をまとめました。大変高い評価を受けています。リカー先生も久しぶりにイラクにもどり、会議では研究内容を発表してもらう予定です。また同行していただく信州大学小児科の坂下先生には、最新の白血病治療について講義してもらいます。感染症対策はなかなか成果をあげておりませんが、小児がんや白血病の治療成績を上げるためにはその充実が必要なので、もう一度、感染症対策の大事さを訴えてこようと思っております。

福島の幼稚園や保育園などでは、放射線量の高い地域の子どもを放射線量の低い地域へ移動させ草や落ち葉や雪に体ごと触れたりゴロゴロできるようにしてあげたいという移動保育プロジェクトが立ち上がり、JIM-NETも応援をしていくことになりました。福島の子どもをしっかり支えつつイラクの子どもたちの支援活動も同時に行なっていきます。ぜひお力添えをお願い致します。

（2012年2月6日）

イラクの子どものイラストが化粧品ブランドの顔になりました！

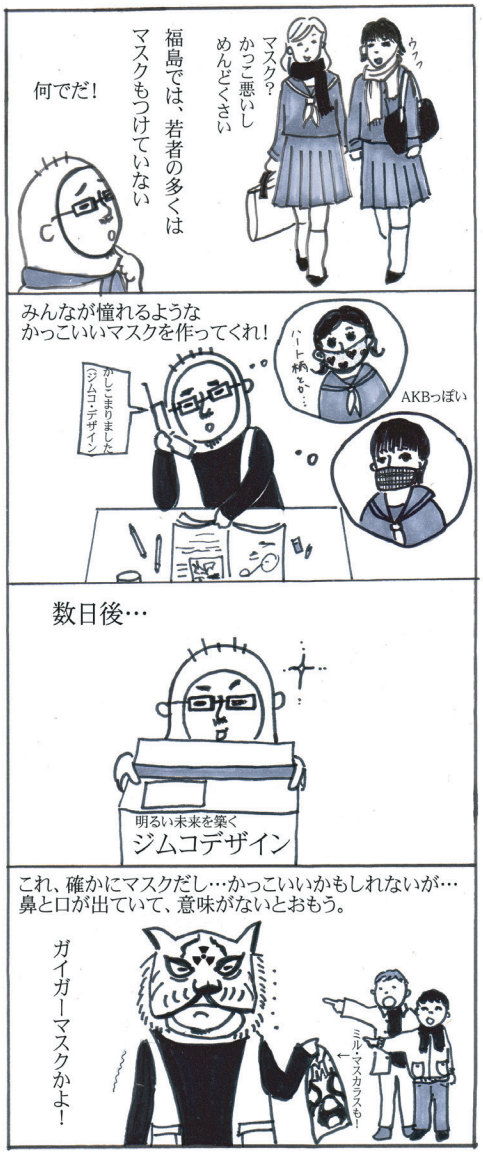
毎日が忙しい女性の意見を集めて、限りなくユーザー目線で贅沢に作られた自然派スキンケアブランド「cuna cura（クナクーラ）」の商品は、パラベンやタール系色素・着色料などを排除し、全て天然由来成分でつくられています。オーガニック認証のダマスクバラ花水を主成分に、ブドウ種子エキスやキウイ種子エキス、ローズマリーエキスなどを配合した化粧水【リフレッシュローズウォーター】（100ml／3,780円）と、31種類もの成分のうち、10種類がオーガニック認証成分で贅沢に構成された美容クリーム【リフレッシュベリーベール】（40g／4,830円）。
1商品につき300円がJIM-NETへの寄付となります。

ご希望の方は、以下のサイトよりお申込み下さい。尚、お申込みの際、「JIM-NET便りを見ました」と伝えていただくと、ホームページ掲載商品すべて300円割引になります。
ぜひこの機会にお試しください。

株式会社THE NOBLE ORANGE
http://www.nobleorange.p/cunacura/
☏ 03-3715-9886（平日9時～12時）

局長くん 第9話

高橋マリモ



【事務局からのお知らせ】

これまでJIM-NETは任意団体として活動してきましたが、この2月より、特定非営利活動法人（NPO法人）となりました。今後は寄付金控除の適用が受けられる認定NPO法人を目指してまいります。放射能汚染から人々を守ることを目指し、開かれたNPO法人として一層充実した活動をしていく所存にございますので、これからもご支援を宜しくお願い致します。

JIM-NET便り 2012年 3月号
発行：特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
発行日：2012年3月20日
〒171-0033
東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303
info-jim@jim-net.net ☏ 03-6228-0746